

第十三回 美しい日本語で詩を聴く会

朗読詩集 2026.1.10

お題「父へ」



- ① 父へ
上村多恵子
- ② 御父母様へ
下田喜久美
- ③ 父を返しに
北原千代
- ④ 義父へ
もみにやーじ
- ⑤ 図書館の午後
波野 仁
- ⑥ 父へ
清水崇彦
- ⑦ 父と話す
スノードロップ
- ⑧ いったらっしゃいおみおくり
春名江吏子
- ⑨ オルゴール
すみくらまりこ
- ⑩ 皮ジャンは父の暖かさ
吉村侑久代
- ⑪ ひげのソネット
有馬 敲

①

父へ 上村多恵子

「整理整頓」

お父ちゃん

かんにんやで

家が散らかってたら

あんなに青筋たてて怒らはる

お父ちゃんのこと

わたし

ようわからなかったえ

「整理整頓」が我が家の家訓だった

何度も聞かされた

何度も怒られた

怖い怖いお父ちゃん

お父ちゃん戦争にいつてはって

軍隊でしごかれたはったんやね

わたし

そんなこと知らなかった

あんなに怒らはるし

わたしはヨソの子かと思うほどやった

お父ちゃん

お仕事うまいこと行ってへんかったんやね

戦後ひとりで始めはったんやね

家が乱れていたたら瘤に障ったんやね

今になったら

わたしにも

ちよつとはわかるえ

②

御父母様へ

下田喜久美

―まず臨終のことを習って他事を習うべし―

日蓮大聖人の御書の一節より

まずここにあることを感謝の意を表します。

いつも心配そうにわたしを見つめ

「これが私の娘です」と晴晴と私を紹介してください

った母上様。さに

世界で私を一番愛してくださいました父上様。

父の厳愛 危険を知らせるインスピレーションの
雷鳴

私の未来に注がれた千里眼

一を知って十をよむインパール作戦の6人の生き
残りとしての経験からの知恵を私に教えようとさ
れていた

一人で切り開く艱難を体から発散させて

あなたは何という鋭い繊細さと鈍器の粘り 慎重
と粘り強さのパラドックス 良心への妄心と忠実

底知れない人の好き

鋭敏と賢明さを持ち合わせていたことか

私は四季の国 日本の仁徳天皇陵のある堺市の

陶器村の太田家の長女として生をうけました。

成仏の相を現じる死

継承したことは「まず臨終のことを習って他事を習

うべし」

安らかな寂光のあとの栄光。

平凡のなかの宝石は佛眼によって見えるという

人生のスタートが 即 目的 が決定です。

正義のために牢獄横死に出会うとも

願わくば半眼半口の

やさしい微笑みのデスマスク

雪のように白くとろ面のごとく柔らかに

軽やかにある

③

父を返しに

北原千代

蘆原（あしはら）の湿（しと）りをゆくと

冬の貝殻が埋まっている

小川まではもう少しだ

かなしみの淵（ふち）のふかいひとが

蘆原の湿りを素足でゆく

わたしは冬のサンダルをはいて

ぬかるみを沈まぬようにゆく

毀（こわ）れかけのオルガンたちが並んで

月のひかりを浴びている

繁みに見え隠れするのはわたしの父だ

じぶんの鍵盤に指をあてがい

自然界のしぜんの下降音階を

ずっと底のほうまでたしかめている

父はもう蘆原に安置されている

仰臥（ぎようが）する父を隠しようがなくて

寢床を教えたのはわたしだ

冬の貝殻をふみしめてゆく

通いなれたこみちのように　いまもおぼえている

旋律がある

窪みのことならよく知っている

どこを押すと痛み　どこを押すと歓喜するか

まぶたをとじても指はおぼえている

小川が父に近づく

小川まではあと少しだ

はじめての歌をうたう

ひかりの粒子が巻いて

父の砦（とりで）が毀されてゆくのをみまもる

水の穂がおきあがっている

南天の赤い実をついばみに 冬の鳥たちが降りて
きた

羽根のうえにひかりの粒子を載せて

夜をあかるくしている

彼らが飛び立つとき わたしは父を手放す

父から与えられた首飾りに 鍔を入れる

琥珀（こはく）の珠（たま）を噛み砕いて 水の舟
に

父の娘であったわたしを流す

④

義父（ちち）へ もみにやーじ

化学物質過敏症（CS）の過度発症以前、義母宅（ぎぼたく）を訪ねる度、お仏壇の義父（ちち）に話しかけていた。

「今日は夫がトラックで遠出。4トン迷子は致命傷。どうぞお守りください。」

「今年の初物のきゅうりです。ナスもトマトも実がつき始めてますよ。楽しみにしていてくださいね。」

「アマンディーヌ焼いて来ました。お義母（かあ）さんと一緒にお召し上がりください。」

「毎日暑いですね。空の飛び心地はどうですか？」

遺影の義父（ちち）はパラグライダー姿。

エンジンを背負って満面の笑みだ。

結婚初年、普段通り飛びに出掛けたまま、虹の向こうへ。

テイクオフ直前の昇天。笑顔のまま。

その頃覚えたてのピンピンコロリという言葉、これ以上ない実演。

健康寿命をギリギリまで満喫し、身内の多くから悲しみの余地さえ奪っていった。

空に居るのだけは間違いない。

「お義父（とう）さん、今、風はどんなですか？」

⑤

図書館の午後 波野 仁

窓の外は

寒々とした冬枯れの景色が

佇（たたず）んでいる

けれども射し込む光は

柔らかで暖かく

本が犇（ひし）めくこの部屋に

穏やかな時間と

オフホワイトの静けさを

満たしている

その優しさに包まれ君は

机に伏せ微睡（まどろ）む

長い髪が垂れる

薔薇色の頬の傍らで

まだ早すぎたのか

「恋愛論」の本が黙り込んでいる

横顔から漏（も）れる

微（かす）かな寝息が

本を擦（くすぐ）っても

目覚める気配は全くない

でもいつの日か

その本が眠りから覚め

沈黙を破り

辛辣（しんらつ）な言葉で

残酷な真実を突きつけ

君が身悶えし

哀しみに打ち拉（ひし）がれても

傍（そば）に居ない父は

何も出来ずに

ただ想いを

送るだけ

⑥

父へ

清水崇彦

父母の往（い）にけるよはひ過ぎなむと

親子の矩（のり）の越へられもせじ

お父さんと私は

夜に向かつて呼びかけた

振り返る父を待つ 東の間

まるで少年のような声

昔のままの声だった

他界して もう四十年

なのに 確かに見えたのだ

闇の中に あの父の背中が

父の享年を今では

越えようというのに

やはり 自分は父の子

いつまでも 親子

父にぶたれたのは 一度きり

小学生の頃 家族で

どこか遊びに行きたいと

駄々をこねた私を

なだめようと 母がくれた

五円玉を 床に投げつけた

父は いきなり

私の尻をむき出しにすると

三回ほど 平手でぶった

私は ワンワン泣いたけれど

本当は知っていたのだ

家族で旅行するなど

どこにも余裕がないことを

あれも 小学生の頃だ

父は 町の写真機屋さんで

カメラを買ってくれた

安い品だが ずっと

欲しかったものだ

桜もまだ遠い 肌寒い公園で

ベンチに腰かける父を撮った

父は 満足そうだった

それが 最初の写真だった

喜んで帰宅したら 母は

黙って 口を固く結んでいた

瞬時に 私は悟った 生活は

カメラどころではなかったと

これからは 教育の時代だと

父は 四人の息子を

教師の薄給の身で みな

大学まで入れてくれた

リンゴ畑も田も 人手に渡った

炬燵で 後ろに組んだ両手に

頭を乗せたまま 天井を見つめる

父をよく見かけた 今は分かる

きつと 思い悩んでいたのだ

そんな父に 私は何を返したのか

母にも 何も報いていない あの時

お父さんと 呼びかけた声には

紛れもなく 悔恨の響きがあった

⑦

父と話す

スノードロップ

今、生きててくれたら

いっぱい話したいことがあるわ
でも

私も ええ年になってるから
もしも

今、生きてたら

いつまで生きてるんやろう…なんて
思ってるかもしれへんね

いま、こっちはね

コロナというウイルスがあつたり
そのワクチンをうった方がええとか悪いとか
それにいまどきまだ

よそでは、戦争してる国があつて
そやのに日本では、テレビを見て
のんきに過ごして…

ほんまに同じ地球に住んでるとは
思われへんわ

それでもなあ
少しでも平和になったらええなと思うて
手を合せてるねん
そっちでも手を合せててな

⑧

いってらっしゃい おみおくり

春名江吏子^{えり}

ギョツと革靴を履く音

毎朝 父の出勤どき

いってらっしゃいと

部屋の奥から声をはりあげる

きょうも顔を見ないで

おみおくり

私が大学へ旅立つ日

大阪駅のプラットホームに
今朝もみおくれた父がいる

なんでわかったん

この急行に乗るのが

笑顔でもなく

両手をうしろに組んだ父の

おみおくり

母があんたみたいな子

他人さんのごはん食べんと

一人前にならへんわ

家でて大学いきや

それないわ

友達の親みんな反対や

家から大学通いがいいのになあ

ようわかったわ

一番遠いところ行ったるわ

父はサラリーマンでその日仕事の中のはずだった

なぜホームに来たのよ

夏休みには 帰るよ と 私

一言つぶやいた

大学へ北の大地に向う飛行機の中

私は照れ笑いした自分に気がついた

⑨

オルゴール すみくらまり」

緑と茶と黄、寄木で装飾された
マンドリンのオルゴールは
いまでも同じ音を奏でている。

母のすべては終わったのに、
巻けば「帰れソレントへ」の
メロディーがゆつくりと流れる

「御父ちゃんは帰れソレントへという

歌が好きやった。

あてにも歌うてくれはったんえ」

貧しい暮らしにあっては

贅沢すぎるイタリア製の品。

百貨店で見つけた途端買う母、

子供心にも不思議でならなかった。

----Torna a Sorrento----トルノ ア ソレント

太陽の輝く海

大らかな愛を歌う父の声

オルゴールの音に被(かぶ)さる。

⑩

革ジャンは父の暖かさ 吉村侑久代

ネットショッピングで買った革ジャンが

戸口に置いてあった

いそいそと袋から取り出して見ると

柔らかい羊皮の茶色の革ジャンだ

こんな年になって

なんでまた革ジャンを着るのと

みんなに思われるとわかっていても

欲しかった

一度は着てみたかったのだ

父は五歳のわたしをハレーかインディアンの

ボデイに乗せて

いわゆるツーリングをよくしたものだ

コスモスの満開の時に

京都の東山から山科に抜ける国道一号線を飛ばして

大津に出る道や

京都の町中を北向きに抜けて

牛若丸の遊んだ鞍馬街道を突っ走るのが

お決まりのコースだった

オートバイのエンジンの匂いと

父の来ている革ジャンの匂いが

町の騒音と混じりあった

ひそかに秋桜が香る道で

父は速度を緩めて

町やお寺の名前や由来をわたしに教えてくれた

袋から取りだしたばかりの革ジャンの匂いが

父の分厚い豚革の革ジャンと混じりあう

わたしは革ジャンふわりと羽織って

コスモスの道を八十一歳に向かってまっしぐらに

走る

①①

ひげのソネット

有馬 敲

オットセイのひげは

海中のえものを探るためにある

キリンのひげは

アカシヤの棘から唇を守るためにある

ひげのおかげで

ヤマアラシは夜の山みちを歩く

ヒョウとライオンは

体が通過できるかどうか判断する

動物のひげの根元には

敏感な神経が配置され

ひげを自在にうごかす筋肉がある

人間のひげの根元には

面目をつくろう神経が配置され

威厳をたもつ筋肉がある

非売品

二〇二六年一月十日

© 日本国際詩人協会